

第二十五回 織田作之助賞 授賞式に出席して

柳田 辰巳

今年二月二十日、織田作之助生家に近い大阪国際交流センターにて大賞、青春賞、佳作の授賞式が行われ、小生も金野和夫氏と共に出席の榮によくする事が出来ました。

(大阪文学振興会、関西大学、毎日新聞社主催)
(大阪府、大阪市、大阪府教育委員会、大阪市教育委員会後援)

大賞作品は開港間もない神戸の鈴木商店を描いた玉岡かおる著「お家さん」で、城山三郎の小説「鼠」とは異なった女性の切り口で然も播州弁や神戸弁、大阪商人言葉を織り交ぜた実に不思議な文体で読者に語りかけ、為に筆者は大変苦労し三回ボツにして四回目で漸く書き上げ、完成まで四年を費やした大作です。選考委員からも語り口の多様さや各章の冒頭に添えられた短歌やこれらの手練が賞賛された。

因みに関西大学長河田禎一氏は「今回も力作揃いだった。大賞作品は上下二巻六百五十頁の書き下ろし作品。兵庫県に生まれ今も住まいする作者の播州弁の言葉使用の見事さ。鈴木商店の女主人公鈴木よねを初めとする人間群像の面白さと描写の見事さ。神戸、大阪、関西が活力と魅力を持っていた時代を描いて、読者をわくわくさせてくれる。

大賞を競った平野啓一郎さんの決壊もこれでもかこれでもかと書かれる問題作であった」

歌人河野祐子さんは「明治、大正、昭和の日本経済の動向をも決した巨大商社鈴木商店。夫亡き後、そのトップの座にあってお家さんと尊称された鈴木よね。彼女の生涯をテンポのよい筆運びで一気に読ませる。六百五十頁

の大作が書き下ろしで有ることも感心した。ミセは表の店。オクは店の裏方。オクはミセを支える女性達を生き生きと描いている。針仕事の場所が随所に出てくるが、細かい描写は女性ならではの。

只、鈴木商店の屋台骨である男性の人物造形にややもの足りなさを感じた」

作家辻原登さんは「お家さんの受賞に喝采を送りた



い。明治初年から昭和に掛けて、神戸に近代日本を牽引した巨大大商社があった。それを暖簾の後ろで支えたのが鈴木よねという一人の女性であった、という設定だ。事実の堆積という制約を逆手に取ることで物語性を獲得した作者の手練が、凡百の女の一生ものを遙かにしのいだ。工夫の一つが三層構造の語りだろう。プロローグとエピソードのわたし、主人公よねの私(ワテ)、そして作者による俯瞰法語りが工夫の跡と考える」

京都造形芸術大名誉学長芳賀徹さんは「こういう面白い小説は本当に困る。ただでさえも慌ただしい歳末の日々、私は他の総てをなおざりにして読みふけてしまった。日清戦争の頃から第一次大戦後にかけて日本の国運上昇と軌を一にして世界に交易網を広げた鈴木商店—その盛衰は歴史参考書の数行によって知っていた。だが、その約五十年の歴史のうちに、鈴木よねや大番頭を中心にこれほどに分厚く熱く

二人の電話

追悼・速水優さんと永井弥太郎さん

大塚 融

三年前と昨年相次いで長逝した二人の「辰巳会」関係者からいただいたお電話が心に残る。

平成八年二月二十二日午前六時ころ吹田市の自宅の電話のベルが鳴

英雄的な物語が営まれていたとは知らなかった。作者玉岡かおるさんの着眼がいい。主人公よねの女播州弁が同時代にぴったりと膚を合わせてゆくのがいい。その歴史解釈が当時の日本民衆の実感に沿おうとしているのが更にいい」

評論の合作の様な文に成りましたが、最後に大賞の最終候補作を上げて筆を置きます。

玉岡かおる「お家さん(上・下)新潮社」

吉川 宏志「風景と実感 青磁社」

岩井三四二「南大門の墨壺 講談社」

有川 浩「阪急電車 玄冬舎」

綾辻 行人「深泥丘奇談 メディアファクトリー」

平野啓一郎「決壊(上・下) 新潮社」

以上

り、寝ぼけながら受話器を取ると、相手は静かな品の良い声調で「速水です」と名乗る。「どちらの……」と、言いかけると、「誠太郎が亡くなりましたね。まもなくスイスに行きますが、なにかお伝えするところがありませんか」と続けたので、速水優さんであることがわかった。日銀総裁に就く二年前のことである。早世した速水さんの姉の子・加賀誠太郎さんはスイス日興の社長で学者肌、速水さんはこの甥には格別に信頼を寄せており、また誠太郎さんも叔父の信頼に応えるかのようにスイス人の妻との間のわが子の一人に「優」と名付けている。誠太郎さんの父・つまり速水さんの義兄は加賀行三、京都・天王山の中腹に「美」の結晶「大山崎山荘」を建てた加賀正太郎の従弟であり、養子である。